

# 『解体新書』前後の解剖学的美術の変遷

○郡 佳子(接骨医学史研究会、柔整連合研究会推薦)

Key words:解体新書 (Kaitai-shinsho) 、美術史 ( history of art)

【目的】『美術解剖学』とは、1500年頃より、イタリアにてルネサンス運動が興り、レオナルド・ダ・ビンチに代表される芸術家達が、徹底的な表現力具現化のために、医学的見地から美術を掘り下げようとして誕生した学問である。

我国は、近世まで漢方医学が主流であり、長崎より西洋医学が輸入されるまで科学的な研究は進んでいなかった。幕府の御用医師も漢方医であったが、最先端の西洋医学を導入する際、徹底的な治療実現化のために、美術的見地から医学を掘り下げようと『解剖学的美術』（仮名）が誕生した。

西洋医学流入に拍車をかけた『解体新書』が、従来の日本医学或いは美術をどのように進化させ、また、どのように変遷させたかを探り、我国の医学史を大きく変えた分岐点としての役割を研究したい。

【方法】『解体新書』以前と、以降の時代を代表する解剖学的美術を比較検証し、特徴或いは前後の相違点を挙げる。

## 【結果】1.縄文・弥生・古墳時代の美術

縄文時代には機能的土器だけではなく、装飾的土器が作られていた。女性をモデルにした土偶はすでに体表解剖学的姿勢を表現している。この時代は、他国の影響を受けず、我が国独自の文化を残している。3世紀後半からの古墳時代には、人型造形物である埴輪が造られるようになる。

## 2.飛鳥・奈良時代・平安時代の美術

仏教美術に偏り、寺院、仏像などの宗教芸術が多い。中国発祥の仏像も、日本で作られると表情が温和になる点も文化の特徴が感じられる。平安時代までの人型芸術は象徴的、装飾或いは記号的、記録的な目的によって造られ、芸術性は人型そのものよりも装飾に表現されていた。輸入された文化を、我国特有の文化に変化させる、「和風」が誕生した。

## 3.鎌倉・室町時代の美術

鎌倉時代は、貴族の壮麗美術から、武家の写実的美術に変化し、『平治物語絵巻』『北野天神縁起絵巻』などは、とても勇壮に描かれている。彫刻では、体表解剖学的価値の高い職人集団『慶隆』が、『興福寺・四天王像』、『東大寺・金剛力士像』などの迫力ある仏像を造った。室町時代は「雪舟」などの水墨画、狩野派による屏風絵が隆盛。

## 4.江戸時代『解体新書』以前 (1603~1773年頃)

江戸時代前期では、浮世絵の元祖・岩佐又兵衛の『洛中洛外

図』、御用絵師である狩野派・土佐派・住吉派の活躍がある。中期には発展して、浮世絵では菱川師宣、琳派では豪華絢爛たる屏風絵が造られる。

## 5.『解体新書』以前の医学史における解剖図

平安時代の984年、丹波康頼が『医心方』を編纂。唐の『外台秘要』に倣い、画力は乏しく芸術性は見られない。江戸時代になり、現存する最古の整骨書である高志鳳翼の『骨継療治重宝記』や二宮言可の『正骨範』においても漢方風の『医心方』と美術的には変わらない。1754年、山脇東洋が本国初の屍体解剖を行い、1759年、『蔵志』を刊行、1772年、本国初の脳解剖を行った河口信任の『解屍編』、両者ともに解剖図は不明瞭であった。

## 6.『解体新書』が誕生した時代

1760年、家治が第10代将軍に就任し田沼意次が権勢を奮うと質実剛健の政治から、税収で治安する商業主義へ転換。海外貿易黒字化、蘭学を推奨。身分不問の実力主義で人材登用するなかで、1771年、前野良沢、杉田玄白、中川淳庵、桂川甫三、小田野直武らと協力して、オランダ語訳『ターヘル・アナトミア』の翻訳を開始する。1774年『解体新書』刊行。将軍家治にも献上。

## 7.江戸時代『解体新書』以降(1774年~)の美術

江戸後期は、田山応挙の写生画、司馬江漢・平賀源内などの西洋画、そして多色刷り表現を確立した錦絵、歌川国芳・葛飾北斎などの浮世絵が全盛した。

## 8.『解体新書』以降の医学史における解剖図

印中伝画風テキストであったそれまでの医書と比べ、『解体新書』が解剖学的美術と言えるのは、西洋絵画を研究した平賀源内の弟子である小田野直武が挿絵を担当したことによる。各務文献の骨格写生はそれよりさらに緻密になっている。

【考察】西洋絵画技法が輸入されると、リアリズムの要求は、芸術世界に限らず、政治、経済、学問、医学に至るまで全般に波及した。

【まとめ】小田野直武の解剖学的美術は後の、歌川国芳、葛飾北斎に多大な影響を及ぼし、近代医学、芸術共に甚大な進歩をもたらした。絵画による彫刻的表現を、解剖学的見地から実現したとも言えよう。